「消費の見えざる手」I&S／ポスト消費社会研究会（企画編集発行）pp. 220-254
1992年9月10日発行　リブロポート

1992-31

消費社会の現在

〈座談会〉ポスト消費社会の到来

堤清二＋大澤真幸＋橋爪大三郎

産業社会が、今静かにその幕を閉じようとしている。それはまた、新たなパラダイムの胎動を予感させる。脱産業社会とは、資本主義、社会主義を問わず、それを乗り越えた社会のことであろう。そうした脱産業社会を、仮にポスト消費社会と呼ぼう。脱産業主義パラダイムとしてのポスト消費社会、消費社会の終焉と、その先に出現するポスト消費社会を語り合う。

橋爪●消費という現象が注目されたのが八〇年代という時代でした。消費／生産というこれまでの一般的な分け方から言えば、消費の側に焦点を当てた。しかし消費社会は、同時にもう一方の側に生産をする社会を想定しているわけで、その意味で言えば、消費社会は産業社会の中の一つの現象にほかならないとも言えると思うのです。

確かに消費社会という言い方が、八〇年代には非常にリアリティをもっていた。しかし九〇年代に入ると、少しおかしくなってきた。どうも消費というものの輝きが失われはじめている。消費だけを切り取ってそこに焦点を当てるという形では、逆に社会が見えにくくなってきたと言える。だからあえて「ポスト消費社会」と呼んだのだろうと思うわけですが、どうもこの変化はもっと大きなパラダイム変換のようにも見えるのです。

産業社会の生産／消費の区分そのものが変化しはじめているのではないか。物流や、情報や、人の流れが、何か新しいフォーマットによって動きはじめようとしているのであれば、もはや消費社会を支えている産業社会そのものが変わりはじめていると考えるべきではないか。だとしたら、この新しい状態を、単にポスト消費社会というふうに呼ぶのではなくて、もう少し具体的な内実をもって、こういう社会であるという肉づけをしていくべきではないかと思うのです。

堤●三年前に大学で現代産業社会論というテーマで話をしたのですが、その時、現代とは後期産業社会であるというような言い方をしました。その性格を三つのキーワードで言い表してみました。シミュレーション、ガジェット、リゾーム★がそれですが、今にしてみればこういうキーワードに託すということ自体が実に消費社会的だったとも言えます。

それはともかくとしても、橋爪さんのおっしゃったように、今はホイジンガ★の言い方を真似れば、まさに「産業社会の秋」と思ったほうがいいのかもしれない。そういうようなことをその講義でも言ったわけです。しかし学生にはどうも通じなかったようです。彼らは歴史の流れの中で物事をとらえるという習慣がないからなのかもしれませんが、反応が非常に悪かったという感じをもちました。

たとえば、大澤さんは著作の中でディズニーランドについて触れられていますね。★ディズニーランドは、シミュレーションや、ガジェットというものそのものだなという感じがしていますが、あれは完全な消費社会のモデルじゃないですか。

大澤●少しアイロニカルな話をさせていただくと、堤さんはどのように自己了解されているかは別として、外から見ている限り消費社会の神話そのものです。しかもその堤さんは、すでに一線から退かれておられる。そういう方と、今こうして話をするというのは、ある意味で非常にシンボリカルです。

もちろん個人的には意識的な選択としてなされたことだと思うのですが、同時にそこに、歴史の無意識の働きを感じざるをえないのです。なぜそんな

★リゾーム
フランスの思想家ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが『ミル・プラトー』で提唱する概念。伝統的なツリー（木）型、垂直型、線状型の存在観、思考方法に対して、リゾーム＝根茎型の存在観、思考方法を主張。それは、無方向的、多方向的、重層的に横断する。

★ホイジンガ
Johan Huijinga　一八七二～一九四五　オランダの歴史家。文化史と精神史との関連を考察。著書に『中世の秋』堀越孝一訳、中公文庫、一九七六、他がある。

★大澤氏のディズニーランド論
ここで言われている論文は、"資本主義のパラドックス"所収の「世界の終わりの遊園地」のこと。

つつみ・せいじ
一九二七年東京生まれ。東京大学経済学部卒業。西武百貨店、セゾングループ代表などを歴任。九一年に経営の第一線から引退、現在、セゾンコーポレーション会長。辻井喬のペンネームで小説、詩集を発表している。著書に『変革の透視図〈改訂新版〉』リブロポート、一九八五、『いつもと同じ春』河出書房新社、一九八三、他がある。

ことを言ったかというと、どうも消費社会という形ではとらえられないようないろいろな現象が少しずつ目に見えはじめているからなのです。堤さんの言われた、シミュレーションやガジェット、リゾームというコンセプト自体も――私自身も使ったこともありますが――今を語るにはちょっと違うなという感じが私にはあるからです。

これはいろいろな水準で指摘できるのですが、たとえばディズニーランド論は確かにおっしゃるように、私の書いた中でも特に消費社会論的なものです。これはもともとインタビュー原稿を論文に書き換えたものですが、村上春樹の小説『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』をベースにしながら、ディズニーランドを浮かび上がらせるという手法でしゃべったわけです。なぜそれを取り上げたかと言うと、今ここで言おうとしているような消費社会としてのディズニーランドと、そのある意味での終焉が、村上によって描き出されているからです。

堤さんがビジネスの世界で八〇年代的だったとすれば、村上春樹はまさに文学の世界で最も八〇年代の感性を代表した作家であっただろうと思います。どこが八〇年代的なのかと言えば、村上のその物事に対するさめた態度です。それはある種の徹底的な相対主義だと言えます。たとえばなにかに対して深くコミットするということをしない、逆に言えばどうでもいいようなことにひどくコミットする。誰でもが指摘するように、実に乾いた感性をもった作家であり、それゆえきわめて八〇年代的であったわけです。その村上が八〇年代の折り返し地点である八五年に発表した作品が『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』だった。

この作品はご存じのように、「世界の終り」と「ハードボイルド・ワンダーランド」という二つの作品が併存しているんです。そして両者は著しい断層を示している。柄谷行人は、村上春樹論で彼の作品の特徴を肥大した超越論的自我という言い方で表現しましたが、★「ハードボイルド・ワンダーランド」のほうはこれまでの村上の作品の延長であるようなそうした超越論的自我によって支えられた世界です。超越論的自我というのは、経験の外にあって経験の可能性だけを純粋に見つめるような自我のことです。これは村上のそれまでの小説に一貫している態度であり、その意味できわめて村上的な作品です。ところがそれに対して「世界の終り」は、単純化すれば自我が、経験の可能性の領域の外に、つまり世界の外に出ることがついにできなくなった話です。つまり超越論的自我が、実質を失って世界の中に再び吸収されてしまうというストーリーなのです。この部分は、それまでの村上的な態度とは対照的なスタイルに立脚しているわけです。つまり『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は、題が示すように、二つのスタイル、二つの世界を共存させた作品なのです。村上がこの後に発表したのが大ベストセラーになった『ノルウェーの森』です。これは、二つのスタイルのうち、「世界の終り」の延長上にある作品で、完全に超越論的自我とは異なる、端的に経験的世界に内在してしまう自我の物語なのです。

村上春樹は堤さんと同様に、時代を先取りするような自己表現をしているわけです。もちろん村上が意識したかどうかはわかりませんが、とにかくそれまでの消費社会的な表現とは別の位相をもった作品へ向かいはじめた。そうした時代の変わり方みたいなことを、ディズニーランド的なるものの終焉に引きつけて論じたわけですから、消費社会論的ではありながらも、それと時代とのズレをすでに私もその時に感じていたのかもしれません。

★柄谷行人の村上春樹論
柄谷氏が村上春樹を論した「村上春樹の風景」は、『終焉をめぐって』福武書店、一九九〇に所収。

新人類とオタクの関係

橋爪●村上春樹は確かに相対主義ですね。彼流の言い方をすれば、「はずしていく」という一言に集約されるだろうと思いますが、とにかくとらわれていることからはずれる。

そういう相対主義はもちろんひとつの進歩だとは思います。しかし、はずし

っ切りというのはまずいのではないか、はずして、はずして、はずしっ切りでどこにも着地地点を持たないということではたしてすむのだろうか。だからと言って、そうした価値相対主義に対して特定の価値を主張するというのは明らかな反動であり、ダサイことです。そこで、価値相対主義が蔓延する時代の中で、罠に落ちないで、しかも積極的なポジティヴな発言をどうやってしていくかが問題でもあったのです。

八〇年代に特徴的な現象として、知の大衆化がありますね。たとえば消費社会について考えるというテーマで、学者や研究者が大量に広告代理店に動員される。浅田彰さんのような人が出てくるとすぐにつかまえて、いろいろ仕掛けを考え、いわゆる知のトレンドのようなものをつくり出していく。こうした動きは、六〇年代、七〇年代にはなかったことです。知は知の世界に閉じこもり、その枠から出るということはほとんどなかった。マルクス主義者であれば、仮に広告代理店が声をかけても、これは資本の陰謀であるなどと考えて、容易に出てはいかなかっただろうと思います。ところが八〇年代になって、全くそういうイデオロギーと関係なく、知というものがどこにでも出ていくという環境が生まれた。コンテキスト・フリーな自由度を知識人が手に入れてしまったわけです。

知識について考えてみると、これが八〇年代の知識のひとつの特徴だと思います。まあ、今回の鼎談もその延長にあると言えなくもない（笑）。

確かにこういった現象は悪いことではないのです。ただ、ある種の危惧がないわけではない。

あえてなぜ危惧という言い方をするかというと、そもそも知識には、考えなければいけない課題、課題が生み出される場所、その課題を提供する場所、といったサイクルで動いているというところがあるはずだからです。ところが現実は、どうも課題のための課題になっていて、課題が生み出される場所というのが現実と遊離してしまっている。単に知識だけが空しく活動しているという状況があると思うのです。こういう知識のあり方こそ、非常に深い意味で相対主義的だと思うのですが、そのこと自体に私は危惧を抱くのです。

大澤●今、橋爪さんがおっしゃったような知のタイプが出てきたのがまさしく八〇年代前半でした。いわゆる新人類というのがその風俗的な対応物だと思うのです。なぜあんなに新人類が新しく見えたのか。とにかく彼らはなにか特定のものにこだわるところがなくて、常に軽やかに対応していくというというイメージだった。要するに村上春樹的な身軽さというのが特徴だったわけです。しかし、そういう延長で今を見ると、現在というものをとらえそこねてしまうなという感じはあります。先ほど言いましたように、村上春樹の小説が示すような二重性が、あらわれてきているからです。中野翠★が――彼女は村上春樹のことがわりと好きでずっと読んできたらしいのですが――『ノルウェーの森』を読んで、自分が贔屓にしていたグルメ評論家が、実は大衆食堂のカツ丼が好きだったことを知った失望感のようなものを感じたと言ってましたが、それほどそれまでの村上春樹の小説と著しい落差があったわけですが、この落差の本質をキチッと見きわめる必要がある。ただ中野翠のように、村上春樹のいわば「カツ丼好み」を暴いたり、嘆いたりしているだけではだめで、中野翠好みのエレガンスがカツ丼好みと共存していたということ、前者が後者に転回していったということの秘密を、解明しなくてはならないわけです。

堤●評論家の加藤典洋さんが村上春樹がしばしば用いる「やれやれ」という ことばについて以前言及していました★。あの「やれやれ」はまさに相対主義的なスタンスを表明する「やれやれ」であったわけですが、中野翠さんの表現にしたがえば、それは「ガツガツ」になってしまいそうですね（笑）。消費社会だったら私のような者でもビジネスがやれるあそびがありましたが、ガツガツと稼がなくてはいけないような社会になってきたということ

★中野翠
一九四六年埼玉県生まれ。エッセイスト。著書に『最新刊』毎日新聞社、一九九〇、他がある。

★加藤典洋
一九四八年山形生まれ。現在、明治学院大学助教授。文芸評論家。村上春樹を論じた『〈まさか〉と〈やれやれ〉』は『日本風景論』講談社、一九八九に所収。

でしょうか。

橋爪●いや価値相対主義に対して特定のイデオロギーを対置させることは単なる古い物語に回帰することにすぎず、それでは価値相対主義の攻撃に勝てません。そうではない場に立たなければならないわけで、だからこそ今が難しいのです。

大澤●新人類が八〇年代的だとすれば、九〇年代に対応するのはおそらくオタクという現象でしょう。★オタクが私たちを驚かすのは、その非相対主義的姿勢です。相対主義とは全く逆に、徹底してひとつの物事にこだわり続けるのがオタクという人たちです。完全な相対主義へのアンチテーゼです。しかし奇妙なのは、だからといって新人類以前の古典的なイデオロギーに依拠しているかというと実は全く違うのです。つまり古典的な絶対主義とは違う。オタクを定義するのは難しいのですが、あえて言うとするとその情報の密度と意味の希薄さの落差にあります。彼らはとにかくある特定のジャンルに対して分厚い情報の密度というものをもっている。ところがそれは意味の分厚さとは全く無縁なのです。普通情報の密度というものは意味の密度と相関関係にあり、意味があるからこそ情報が収集されていくわけです。ところが彼らの場合は、明らかに情報の密度と意味の密度との釣り合いがとれていないのです。フジTVの「カルトQ」★などを見てつくづく感じるのはそこのところです。新人類と全く違う面を持ちつつも、ある面では意外に近いところがあるのかもしれない。両者の間には、村上春樹の内に対照的な二面性が共存したり、直結できたのと似たような、逆説的なつながりがあるかもしれない。ちなみに浅羽通明は、オタクの起源と歴史を論じた文章の中で、もともと新人類とオタクは一体だったと述べています。★

橋爪●情報の密度と意味の希薄さの共存という指摘は、確かにそうですね。その意味ではオタクと新人類とはたかだか変種か亜種のような関係にあるのでしょう。つまり、オタクには徹底したこだわりはあっても、それは「絶対」というものとは無関係なのです。

オタクには「絶対」に対する強烈な否定がある。この場合の「絶対」というのはイデオロギーと同じものであり、かならず複数の人間によって共有されるという条件があるのですが、オタクにはそれがないのです。「絶対」ないしイデオロギーというものは、共有されるわけですからそれは一種のよりどころになる。

正当化の根拠にもなりえるわけで、事実、新人類よりずっと以前の世代にとってはまさにそれがイデオロギーたりえたわけです。ところが、オタクはそうした「絶対」性を拒否するわけですから、自分一人で根拠を見いださなくてはならない。しかし、一人でやっているわけだから、自分がこだわっていることを他者に対して正当化する手段というものは本来もちえないわけです。そういう意味でやはりオタクは、相対主義なのです。

堤●先ほどの肥大化した超越論的自我という言葉で言えば、現象学的認識のきわめて表層化したものと言えるのではないか。つまりなんでもかんでもカッコに入れてしまって、とうとうカッコに入れるものがなくなってしまったのが、まさに消費社会という状況だろうと思うのです。そうするとさてこれからどうなるのだろうかとどうしても知りたくなってくるものです。

死の意味の変容

大澤●自分のやっていることをアイロニカルに言うのもなんですが、ポスト消費社会という言い方自体実はまだ消費社会的なんですよ。堤さんが今おっしゃったようにどれだけカッコに入れるかという競争をまだやっていて、お前はまだカッコが足りないぞ、とにかくカッコにたくさん入れたほうが勝ち、みたいなことの延長なんですね。ポスト消費社会という言い方は、要するに消費社会もまたカッコに入れてしまえということですから。

★オタク論
大澤氏は、『ポップ・コミュニケーション全書』PARCO出版、一九九二、の中で本格的な「オタク論」を展開している。

★「カルトQ」
フジTV月曜日の深夜、0時40分から放映されているクイズ番組。毎回「東急ハンズ」「ラーメン」「タカラヅカ」「くすり」などという一つのジャンルを取り上げ、その道(?)のオタクを自負する人々が競い合う。たとえば「ラーメン」では、ラーメン店の壁のクローズアップの映像や麺の本数などによって、そのラーメン店を当てるといった、興味の対象にない者にとっては全く答えられない珍問、奇問が続出する。

★浅羽通明
一九五九年神奈川県生まれ。「みえない大学本舗」主宰。ここで言われている論文は別冊宝島一〇四『おタクの本』JICC出版局、一九八九所収の「高度消費社会に浮遊する天使たち」のこと。

さらにアイロニカルなことを言うと、これはしゃべっていいかちょっと迷ったんですが、例の絵画の鑑定書偽造という事件がありましたね。消費社会というものを担ってきたセゾングループとしては実にカッコ悪いことが起こったなと思いました。そもそも消費社会というのは本物性を捨てる、ある意味で偽物性(シミュラークル)を追求することであったわけです。つまり徹底して偽物で押し切るみたいな開き直りでもある。だから、本物であることを保証する鑑定書を偽造するということは、一方で言えば、とても消費社会的な行動なわけです。しかし、他方では、このようなやり方は、本物性についての神話を利用しようとしているわけですから、反消費社会的なものだとも言える。結局、この事件は、このような二面性に足をすくわれたわけです。こういうことが、日本の消費社会を代表したセゾングループの中から出てきたということは、またしてもシンボリカルなことです。

堤●この事件を知った時、よくやるよと思いましたね。昔から「小説を地で行く」という言葉がありますが、鑑定書の偽造というのはまさに消費社会を地でやってしまったことになる。消費社会というのは、私の感じでは地でやってはいけないという前提の上に成り立っている社会です。だからこそ逆にシミュラークルやガジェットという言い方ができるわけで、美術品のガジェット化を本当にやってしまったらそれはシミュラークルでもなんでもなくなってしまう。小説の主人公がいくら殺人を犯しても許されますが、やはりそれをほんとうにやってはダメなわけですから。ところが、この事件はそれをやってしまった。消費社会のフィクション性ということを誤解してしまったのでしょう。実に皮肉なことです。

橋爪●その「小説を地で行く」という指摘は重要だと思います。カッコに入れるゲームにみんなが熱中していながらも、では一切合財すべて消費社会化してしまったのかというと実はそうではなくて、それを支えているまさしく地の部分、条件というようなものがどこかにあるはずだという暗黙の了解みたいなものは当然あったわけです。消費社会を下支えする条件があるというのが、健全な消費社会のあり方だと思うのです。この条件が別なものに置き換わったりした場合は、当然このゲームは終わる運命にある。ではその条件とはなんだったのだろうかと突き詰めていくと、結局それは、ある意味でのリアリズムだったと思うのです。

今の鑑定書の偽造で言えば、消費社会の地の部分にはやはり商品経済が歴然と存在しているわけです。消費社会といえども、商品経済という条件、ルールの上に形成されていたという事実は否定できないのです。商品経済とは言うまでもなく、モノに価格があり、その価格は価値を体現していて、売り手と買い手の信用の中でモノが売買されるというルールで、このルールから外れてしまっては消費社会も成立しないわけです。今回の事件は要するにそれを踏み越えてしまった。

こうした踏み越えが、実は社会のいろいろな場面で起こりはじめているのではないか。と同時にそれを支えているルール自体も揺るぎつつある。たとえば消費社会を含めた商品経済も、治安が維持されていること、国際貿易の秩序が安定していて貨幣価値も安定していること、政治が機能していることなどの、さらに大きな枠組みによって支えられている。そういう枠組みに支障がないという条件が整っている限りで、商品経済も消費社会もうまく動いていくわけです。ところが、湾岸戦争や冷戦の終結といったかたちで大きな枠組みそのものが改変されることになると、当然消費社会に対しても影響が出てくる。バブルの崩壊もありましたが、いずれにせよそうした枠組みが揺らぐことで消費社会への疑問も膨らんできたのでしょう。消費社会の一種軽いノリとは異なる、逆になにか重い感じが、今少しずつ出てきているように思います。それは私にもはっきりした言葉では言い表せないのですが、なにか違ったリアリティのようなものを感じます。このリアリティを語る言葉を、我々はまだもっていないように思います。

大澤●ディズニーランド論でも触れたのですが、一見死とは無縁に見えるディズニーランドには、背後に死の問題というのが潜んでいるのです。私はそれを死を生に内在化させ、生の全体に向けて解除してしまった、いわば死を消費してしまったというように言ったわけですが、この問題というのは消費社会を考えていく上で非常に重要だと思っています。死は消費社会という文脈には実は乗りにくい問題なのです。消費社会が相対主義的だと言ってきたわけですが、死とは人間において相対化できない差異の一つだからです。

橋爪さんは消費社会を支えている基本的な条件について話されましたが、それは産業社会的な原理、あるいは近代を律している倫理があって、その上ではじめて消費社会も成立するんだということだと私は理解したのですが――。であるとすれば、それは死の問題とも当然つながってきますね。

橋爪●自己の死は――それを見据えるもう一つの視点というものがなければ死の意味もないわけですから――、確かに相対化できません。しかし逆に言えば、相対主義的に考えるからこそあらわれる問題機制と言えなくもない。相対主義を取る限りは、死は相対化できないわけです。そういうわけで、大澤さんの意見にはおおむね賛成です。

もう一つ、商売の倫理や道徳を忘れて消費社会はありえないのですが、それは私の意見というよりも、もっと一般的な理解だろうと思います。近代(モダニズム)というものを前提にして、そこから出発している消費社会が、近代を逃れられると考えるのは単なる幻想で、当然そうした幻想は近代によって撃たれることになります。

堤●消費という行為自体は、人類が誕生した時からあったわけです。ですから、消費を論じる場合には、近代産業社会の消費とそうでない消費を分けて考えないとダメだと思います。ほんとうに消費を論じるのであれば、近代産業社会以前の消費について分析すべきであり、近代産業社会になって生産と消費が分離した消費は意味がだいぶ違ってくるなとは今考えているのです。ですから、消費社会という言い方で後期産業社会を名づけたのは、今にしてみるときわめて不正確だったと思っているのです。しかし、だからこそ消費社会が発生する本質的な要素は、産業社会の中にすでに本質的に組み込まれていたということは言えるわけです。その本質がたとえば商品というものに向かって肥大化したというだけであり、その元は産業社会の誕生の時からすでにあったものです。相対主義というものが産業社会によって形成されてきたものだとしたら、確かに大澤さんの言われる通り死が相対化できないものとしてあらわれてくるというのはそうかもしれないと思いますが、そうであれば死の意味もまた大いに変わるのではないかとも思うのです。

大澤●産業社会以前と言うか近代以前と言うほうがいいかもしれませんが、そういう時代には生を意味づけるものはポジティヴな価値だっただろうと思いますが、近代以降では必ずしもそうではない。いやむしろポジティヴなものを失ってしまって、逆にネガティヴなものによって生が意味づけられるということが起こるのです。そのネガティヴなものの端的な例が死だと思います。ネガティヴな死によって生が意味づけられる、それを哲学で表現したのがハイデガーの『存在と時間』です。★ハイデガーの主張は、単純化すれば死によって生命が閉じられるという事実によって実存にめざめよと言うわけです。

つまり人生の有限性ということの自覚から、生の意味が出てくるというのです。これは究極の寝業みたいなものです。なにも意味づけるものがないという条件によって、逆に人生に意味を与えようとしているわけですから。まさにこれは近代の論理の行き着く果てだと思いますし、ディズニーランドの内部に隠された死というものも、そうした近代の論理の究極の一つの姿かもしれないと思います。

★ハイデガー
Martin Heidegger 一八八九～一九七六 ドイツの哲学者。フッサールに学び現象学から出発し、西欧の形而上学が長く隠蔽し続けてきた存在を問う現存在分析を主張した。著書に『存在と時間』I II III 桑木務訳、岩波文庫、一九六〇、他がある。

死といえば、社会的な関心として脳死問題がありますね。死を生命機能の停止であるとすれば、どの機能の停止をもって死とするかということになるわけです。これが脳死問題ですが、ここには、死ということが、つまり人間の有限性を画する境界線が、今や不明確なものになりつつある、という状況が、露呈しているように思います。これは、法律や臓器移植のような特別な場合の倫理ということを超えた、われわれにとって普遍的な倫理の問題につながっているわけです。なぜなら、脳死問題の先には、死というネガティヴィティによって生にポジティヴな意味を与えようとするハイデガー流の究極の寝業すらも破綻するような、地点が待っているかもしれないのですから。

社会主義のイデオロギー効果も、ある面では死と生命の関係に似ているところがあります。つまりこれまでは社会主義という否定的条件を選択しないということによって自らのイデオロギー性を保証してきた自由主義諸国にとっては、社会主義の消滅はついにその否定性を失ってしまうことを意味します。

失語症とコミュニケーションの回復

堤●私はあるところで一年間時評ということをやったのですが★、印象的だったことは文化が失語症の状態に陥っているということです。とにかく知的営為がことごとく失語症に陥っていてそれはすさまじいものがありました。ここにも社会主義の崩壊の影響が出ていると思いましたね。ソ連や社会主義国がイデオロギーの権化だと思われていたわけで、それが崩壊したことによっていっせいに失語症状態になってしまった。知のほうが世界よりずっと遅れているなという感じをもちました。

橋爪●消費社会というのは先ほども言いましたが、商品経済の中にあるわけです。そこではさまざまな関係が商品関係に置き換えられる。人間関係もある面ではそうした商品関係に代替されるわけですが、それとは別に言葉の流通、コミュニケーションというものがある。たとえば日常会話からはじまっていわゆる知の領域まで、一部は商品化もされますが、大部分は無償で行われる。この事実だけとっても、商品経済とは別の論理で動いていることがわかります。知の自律性というものがあるのです。

ところが、二つの自律性が変容しはじめた。商品経済とは異なる倫理やオーダーで動いていたはずの言葉の領域でも、変化が出てきた。しだいにどうでもいいようなことが多く語られはじめ、むしろ意味のあることや積極的な発言が忌避されるようになってきた。そして、発言しなくてはいけないようなことに対して沈黙することが多くなってきたわけです。消費社会になって言葉の流通が、商品の流通と必ずしも別々ではなくなってきたのかもしれません。商品の流通と全く別の論理をもっていれば、これほどひどい失語症に陥ることはなかったはずですし、またイデオロギーの崩壊による打撃を被ることはなかっただろうと思うのです。

確か堤さんはあるエッセイで「内臓のある言葉」という表現を使っておられましたね。

堤●ええ、そういうことを言ったことがあります。

橋爪●内臓というのは人間の器官で、おそらく、言葉をしゃべることと人間の生命活動ということを重ねておっしゃったことだろうと思いますが、言葉というのはまさしくそういうものでしょう。言葉に熟達していく過程がすなわち人生でもあるわけです。言葉というのは単なる手段ではなく、喜びとか人生そのものですね。

ハイデガーの言うことは正しいのですが、現象学的に還元できないものが言葉だと私は思うわけです。言葉というのは、自分にとって人生であるけれども、それはまた他者の人生でもあるわけです。他者へ投げかけるものであり、また他者から投げかけられるものでもあります。そのような、非常にパ

★堤氏の時評
産経新聞紙上で、辻井喬名で九一年八月から一年間行われた論壇時評のこと。

フォーマティヴなものなのです。その意味で、現象学には収まりきれない。言葉は、ある意味では永遠に生き続けるもので、そこに死はないんですね。消費社会論に収斂してしまうことは、ありえないはずなんです。

大澤●しかし、八〇年代に思想の分野では言語論が非常に盛んになりました。リアリティというものを言葉のほうに全部解消して、言葉の外にあると思われるような内的な現実も言葉の単なる効果にすぎないんじゃないかという議論まで出てきました。構造主義、ポスト構造主義はそうした言語論と連動していたわけです。そして、これがまた消費社会的論理とも非常にフィットしていました。

堤●シニフィエ／シニフィアンというキーワードも八〇年代によく聞かれましたが、シニフィアンだけあってシニフィエのない状況が消費社会じゃないかという気がしていました。そういう消費社会の言葉の中で、それをうまくすりぬけたように見えたのが村上春樹だろうと思います。あとの大変多くの作家は、本当に困ってしまった。人生にまともに向かおうとするとたんにダサクなる。他人が見てダサイのならまだいいのですが、書いている本人がダサいと思うわけですから。

大澤●それで思い出すのは、最近さかんに読み直されている、ラカンの議論です。★ご存じのように、ラカンは、シニフィエなきシニフィアンだとか、シニフィアンの戯れだとかいったことについて述べています。★このラカンのシニフィアンの論理は、昔紹介されたときには、構造主義的に解釈されていたように思うんです。しかし、私はクリプキ★を読んだときに、ああそうかと思ったのですが、ラカンのいうシニフィエなきシニフィアンの典型は、固有名詞なんです。クリプキは、固有名は対象の性質についての記述に置き換えられない、つまり（内包的に）定義できない、ということを言っている。だから、たとえば「橋爪さん」という固有名によって何が指されているのかを言語内で示そうとすると、「橋爪さんと呼ばれている人」という形で、循環的・同語反復的に定義するしかなくなる。固有名というシニフィアンには、シニフィエがないからです。では、こういうふうにクリプキ的にラカンのシニフィアンの理論を理解した場合に、それが、構造主義的な理論にフィットするかというと、全くちがう。シニフィエなきシニフィアン、つまり固有名ということが示しているのは、いくぶん逆説的なことですが、指示ということが言語に外在しているということです。つまり、固有名（シニフィエなきシニフィアン）を用いているとき、私たちは、言語の内部から到達できない指示対象、まったく外的な現実というものに、かかわってしまっているわけです。あるいは、固有名が、こういった現実の外部性を隠蔽しているのだ、と言ってもよいかもしれない。私が言いたいのは、かつては言語論的に――言ってみれば消費社会的に――解釈されていたラカンの議論の中に、そこには解消できない含みがある、ということです。そこには、消費社会以降的なものへの通路があるかもしれない。

★ラカンの読み直し
雑誌「批評空間」福武書店、一九九一～ の連載スラヴォイ・ジジェク「イデオロギーの崇高な対象」が引き金となって、これまでとは異なる新たなラカン解釈が日本ではじまっている。

★シニフィエ／シニフィアン
所記／能記とも訳されるが、言語学ではシニフィエが〈意味されるもの〉シニフィアンが〈意味するもの〉。言語学者ソシュールによれば、前者は概念、後者は音的イメージで、両者は互いにその存在を前提にしてのみ存在しえるものだという。

★クリプキ
Saul Aaron Kripke 一九四〇～ アメリカの哲学者、論理学者。著書に『名指しと必然性』一八木沢敬他訳、産業図書、一九八五、他がある。

日本語の二重性

大澤●言葉のことが出たので、日本語のことを考えてみたいのですが、橋爪さんは言葉の思想性と日本および消費社会についてどういう感じをもっておられますか。

橋爪●一つのモデルとして一神教モデルを考えてみますと、これは言葉を学ぶチャンスになっている。ユダヤ教、イスラム教、キリスト教がもちろんその流れに入るわけですが、日常生活のあるべき姿がテキストの形で記述されているわけです。それはいわば法律のようなもので、そのテキストとの関係で自分の日常を考える。つまり、思想書であると同時に道徳書でもあるわけです。すべての機能を兼ね備えた権威あるテキストというのがあって、それをとりあえず読むというところから、彼らの言語体験は始まるわけです。そういう権威あるテキストを経験した民族というのは、言語の性能に対

してセンシティヴであり、非常に厳格な言葉遣いをします。それがまた一種の思考の成熟を促すわけです。言葉が生活を強く律している。

では日本ではどうかというと、非常によいとされるテキストはあったのですが、日常を律するというレベルのものではなかった。実はそういうものを、日本はこれまで一冊ももっていないのです。こうしたことが、日本語を軽いものにしているんじゃないかと思います。

大澤●八〇年代はまさしく聞こえのよい言葉が流通し、どれだけカッコいい気持のいい言葉が発明できるかを競い合っていたということはありましたね。

堤●重みのあるテキストが存在しなくなったというのは、明治以後のまさに日本文化の特徴ですね。明治以前には橋爪さんのおっしゃるような日常生活を律する力をもったテキストが少なからずあったように思います。たとえば、聖徳太子の十七条憲法まで遡ってもいいと思います。ところが、社会の根本的な性格はそのままにして、テクノロジーだけ輸入して強引に産業社会化してしまったために、あらゆる在来のテキストが日常を律する力を失ってしまった。たてまえと本音という近代の日本文化の特質はそういうところから出てきたんじゃないでしょうか。たてまえは文字で表現され、本音は文字では表現されない世界として自律するというような構造。私はこれまで言葉を殺してしまったのは明治維新の性格にあったと理解していましたが、今の橋爪さんの話をうかがって認識を少し改めなければいけないなと感じました。

橋爪●明治以前の日本に、どこまで厳格なテキストがあったのか疑問です。たとえば禅というのは、テキストを廃棄するための仏教の運動です。一方法華宗と浄土教がありますが、どちらも題目、念仏でさまざまな複雑なテキストあるいは思想体系というものを非常に単純化し、一種の儀礼、呪術にしてしまった。もう一つ、『論語』というものもあります。これは中国で確かに行為規範なのですが、あるべき人間の理想状態を記述したものにすぎないと理解されたために、日本では一種の教養書になってしまった。

堤●大変説得力のある話ですが、たとえばこんな例はどう考えたらよいのでしょうか。「秘すれば花」というような言語表現がありますね。先ほどの死という話とも重なるかもしれませんが、言語表現をもたないということがすでに言語表現になっている。そういう言語表現が明治以前にはまだ生きていたと思うのですが、それが明治以後生きていられなくなってしまった。

橋爪●それは私の説と矛盾しないと思います。もし私の説を採るとすれば、少なくとも日本の言葉は二重に殺されたことになるのかもしれない。

大澤●矛盾はしていませんね。ただ、橋爪さんの言ってる言葉の積極性と堤さんのおっしゃることとは少しニュアンスが違うとは思います。「秘すれば花」という日本語の表現は、日本語としてのある種のすばらしさを代表していますが、それは橋爪さんが問題にしたテキストの権威に頼るような積極性とは少し違う。むしろそのことを傍証する例なんじゃないですか。

堤●なるほどそうかもしれない。

大澤●たとえば聖徳太子の十七条憲法というのは法律ではなくて、心構えのようなものです。しかし律法というのはもっとずっと厳格です。なにをやったら律法違反かそうでないか一義的に決定できるわけです。だからこそその律法に準拠して生活を律することができるし、またそうしなくてはいけない。そういう積極さがある。ところが十七条憲法は心構えですから、何がそれに違反していて、何が違反ではないか、ということがはっきりしないのです。そういうもので、生活を厳格に律することは原理的にできない。そういう曖昧なものを我々の先祖は引き受けてしまった。橋爪さんがおっしゃった日本の状況を非常にはっきり示す証拠の一つが十七条憲法ではないでしょうか。

堤さんはたてまえが文字になり、本音が文字にならなかったとおっしゃいましたが、これと少し似た構造は実は明治以前からあったように思います。かつて日本では正式な表現に漢文を使用していましたが、これは本音が書かれることはなく砂上の楼閣でしかなかったわけです。民衆の生活に根ざした表現ではなかった。つまり正式の文字というものは日本の場合ずっとたてまえだったわけです。柄谷行人が面白いことを言ってます。日本語というのは文字を二つ(あるいは三つ)もっていて、これが還元不可能な事実であり、われわれの思想や態度を規定している、というのです。★もちろん、その二つの文字というのは、カナと漢字です。この二つの文字には、明確な使い分けがあります。カナは、やまとことばを、そして漢字は、もともと外来語を表現しているわけです。現在では、カタカナというもう一つのかなが、外来語の表示にあたっているわけですが。漢字であれ、カタカナであれ、ともかく重要なことは、外来語が、まさに外来語として示されてしまい、文字の上にその痕を明確にとどめるということです。この文字の二重(三重)性が、外部から入ってくる異質な要素を、明確に拒否もしないが、しかし、内面化したり、具体化することもしないですむような装置になっている、というわけです。したがって、たとえば儒教を引き受けたとしても、それはあくまで外来思想として引き受けているにすぎず、その絶対性みたいなものをわれわれの具体的な生活の中で内面化できないしくみになっている。そういう表現様式を日本人はもってしまっているというのです。

堤さんは古事記について書いておられますが、★私も古事記の漢字について少し考えてみたのです。★面白いと思ったのは、堤さんが、古事記の執筆経緯を小説化したときに、古事記の表記の問題から入っていることです。古事記は漢字しか使っていませんが、すでにかなにつながっていくような特殊な漢字の使い方がされています。つまり漢字を二重に使っているわけです。それは今言った外来語の日本的な導入の仕方ともからむような問題をはらん

★柄谷行人の日本語論
柄谷氏は、雑誌「批評空間」の連載「日本精神分析」二回目で日本の思想と文字について展開している。

★堤氏の古事記について
堤氏には辻井喬名で、古事記の成立を題材にとった小説「ゆく人なしに」がある。九二年に河出書房新社より同名で単行本になった。
★大澤氏の古事記論
雑誌「現代思想」九二年四〜六月号に掲載された「国家形成の二つの層」のこと。

でいると思うのです。

堤●かなは表音文字で、漢字は表意文字だと我々は考えていますが、中国で漢字を使う場合はやはり音と結びついていると思うのです。毛沢東の改革もそういうことが深く関連しているはずですが、それはおくとしても日本でも漢字が音と結びついていればずいぶん違っていたと思いますね。日本人の外来語に対するコンプレックスはもしかするとそうとう前からあつたのかもしれない。

大澤●ほんとうにそうですね。今はとにかくカタカナを使います。カッコイイと思って使うわけですが、カタカナによって表現するというそのことによってかえって、そこに表現された思想は、自分たちの生きている現実にとっては無縁な、表層的なものになってしまう。つまり、それを内面化することを拒絶しているわけです。だから非常にへんな使い方になっていると思います。

橋爪●漢字は、確かに音と結びついてはいますが、やはり表音文字ではなくて、もともとは表意文字(象形文字)なのです。というのは、我々は気づかないかもしれませんが、中国というのは多言語国家なのです。全く同じ文字を全然違うように読んだりするわけです。たとえば広東語と北京語では文字が同じでも、発音はまるきり違うと言っていい。

堤●そういう逆の面もあるんですね……。

水中花の戦略

大澤●マクルーハンは音声の時代、文字の時代、電子の時代という三段階でメディアの進化を考えましたが、日本の場合は音声の文化と文字の文化の断絶というのがなくて、それを統合することなく共存させたきわめて珍しい文化だと思うのです。そのはしりをすでに古事記に見ることができるのです。

私が古事記に注目した理由は、文字の二重性もありますが、むしろその成立期が日本という国家にとって非常に重要な時期だからです。そして、そこに投影されている、社会構造上のある両義性が、実は文字の二重性ということと対応している。古事記はよく知られているように国家の形成というものが多重構造をもって描かれています。おおざっぱに言えば二重構造です。もちろん、国家の起源の核になるのは、天孫降臨の場面です。ところが、天孫降臨に先だって大国主の国づくりというのがあって、それから国譲りを受けるかたちで国家形態ができる。なぜ国家イデオロギーを正当化するための神話が、国家の起源を高天原からの天孫降臨と大国主による国づくりという形で二重化して語らなければならなかったのか、そこに疑問があったわけです。それは先に言ったような文字の二重性と関連してくるわけです。つまり、日本の社会にはちょうど漢字に代表されるディメンジョンとかなに代表されるデメンジョンがあって、それを神話の水準に投影されたときに国家形成の二重性というかたちであらわれたのではないか、というのが私の結論です。細かな議論を省略して、単純化して図式的に言うと、日本は、一方では国家をもちながら、他方では国家をもたないという非常に奇妙な社会なのです。

クラストルという政治人類学者が『国家に抗する社会』という本を書いていますが★、彼の言葉を援用すれば、国家に抗する水準と、国家に与する水準が日本では共存してしまっているのです。つまり国家を律するイデオロギー的水準を持ちつつも、一方でそれを拒否する。日本の文字の二重性とまさに二重写しになる構造をもっているのです。

橋爪●中国での漢字の使用は、きわめて政略的かつ政治的です。もともと文字が成立した当初には、政治を行うための占いに使われたわけですが、最終的にはそれが法律を書きしるすためのものになっていく。また中央から地方へ出す指令文書物としても使われるわけです。日本が継承したものはそ

★クラストル
Pierre Clastres 一九三四〜七七 レヴィ=ストロースの影響下で、人類学の進化、発展段階という考えを批判した政治人類学を展開。『国家に抗する社会』は、渡辺公三訳、風の薔薇発行、白馬社発売、一九八七。

の漢字だった。

どうやって漢字を受容したのかというと、おそらく二通りあると思うのです。一つは漢字には特定の音価があります。たぶん中国人に直接教えてもらったんでしょうが、これはこう読むんだというように、聞いて習う。そうすると日本語に音が似ている言葉もある。その段階で日本語の音をあてはめることができるということがわかる。もう一つは、漢字の意味を独自に受容するやり方。仏教の経典などはこっちのほうだと思います。要するに両方の方法で日本は漢字を受容したわけです。そして、結果的に、一つの言語体系になっていく。これは非常に珍しい現象であるとともに、日本語の長所でもあります。

これまで日本人で、こうした二種類の系統を持つ言語体系としての日本語の性能を、フルに活用した人はおそらくいないんじゃないでしょうか。たとえば現在の法律などは非常に言葉としてすわりが悪い。同音異義語なども多くて、とても日常の生活に浸透していくような代物ではない。それでも、二つの系統をうまく使い分ければ可能性はあると思っているのです。日本語というのは性能がよすぎて、まだ十分に使いこなされていないというのが私の意見です。

消費社会との関連で言えば、日本の場合、まず翻訳スタイルの言説というのがあります。種本があって、それを翻訳するという前提で書かれたもの。これは、いちおう通用はしますが、堤さん流に言えば内臓がない。もう一つは、噂話的なもので、公共の場で語りうる言説にまでならないもの。いずれも先ほど言いましたように、言葉が出てくる場所、あるいは言葉が語られる場所というものと、うまくリンクしていないように思います。それをどうやって確保するかということで、ずっと日本人はやってきたわけですが、消費社会になってまたそうした場所から遠ざかってしまったようです。

大澤●私も内臓がない言葉をしゃべっていると非難されるかもしれません。だからといって、流行語を好んで使っているわけではありません。シミュラークルなんて今でも使うときに非常な気恥ずかしさを覚えますが、ただ自分の中で的確な表現を探し求めていくうちにこれだと思った言葉が奇妙な漢語になってしまうということは確かにありますね。何重かの否定と屈折を経て出てくる言葉はわりとそういう漢語だったりする。もちろん単純な実感をそのまま言葉にすることへの不信感からもともとスタートしているということはありますが……。

橋爪●それはわかりますが、みんなが大澤さんのような難しい書き方をしたなら、国民文化は育たなくなりますよ(笑)。

堤●今の話を聞いて気がついたのですが、もともと自分のはたいした小説ではないのですが、学校の講義録のようなものを一緒に書いていると、小説がよけいにひどくなるという経験があります。大学の先生で小説を書いている人はずいぶんいますが、そのあたりはうまく使い分けているのかしら。

大澤●そういう人はおそらく講義録を書いていないのでしょう(笑)。

橋爪●私も言葉につまるということはしょっちゅうあります。

学生の時に言葉にいよいよ困ってしまって、例の〈 〉に入れるという方法を使ったことがあります。あれは確か吉本隆明がはじめたものですが、けっこうはやりましたね。同じ言葉でありながら使い方や意味が違うという時に使うわけですが、使い方次第ではうまく逃げられる。しかもあれを使うとなにかものを考えているんだという雰囲気が出るわけです(笑)。ただ、だんだんやっているうちに、これはまずいぞと思うようになってきました。

そもそも言葉は非常に豊かな表現の可能性を持っているわけですから、状況にキチンと対応させていけばかなりのところまで行けるはずなのです。あえて難しい言葉を使わなければ表現できないこともあるかもしれませんが、ほとんどの場合、日常語の延長で十分に表現できる。まさか日常語で〈 〉をつけるということはしませんから、むしろ余計なことを書かないと

か、論理に忠実であるとか、言葉と言葉のつながりに配慮するとか、そういう一種の言葉のフットワークの部分でけっこうやれるはずのものなのです。これはなにも新しいことでもなんでもなく、誰でもできることだと思います。私はそういう、プレーン・オムレツのような言葉のあり方を考えているのです。

堤●橋爪さんの文章というのは、どれも平易な言葉で書かれていますが、一つ一つの言葉がいろいろな重量をぶら下げていますね。こういう書き方というのは、これまでそんなになかった。

たとえばこの前ある対談で憲法は改正したほうがいいと言ったんです。それは第九条は変えないで、要するに字句を直す必要があると言ったわけです。日本語として今の憲法はあまりにひどい。ところが字句を直すのでも憲法改正しなければならないわけです。それで文章がひどいから私は憲法改正だと言った。しかし、こういう議論はあまりみんなしないらしい。

橋爪●しませんね。おっしゃるように憲法の文章はひどい。しかし刑法はもっとひどい。あれはほとんど日本語の体をなしていません。ようやく改正作業に着手しているようですが、法律が血や肉となることは言葉の健康にとって非常に大切なことですから、ぜひ進めてほしいと思います。

大澤●内臓感覚あるいは身体感覚から出た、つまり自分にとって自然な表現というのは実は自分にとってはいくつもあります。逆にいえばどれも自然ではないということにもなるわけですが、要するに多層的です。ですから私は自分でこれだと信じていることを脱中心化することのほうが自分としては重要な課題だったわけです。これはある面から見れば消費社会的といえるかもしれません。だが他方ではネガティヴに語ることがカッコいいというのが八〇年代的な言語状況であったわけですが、これに対しては飽きも飽きしていた。語ることというのは橋爪さんがおっしゃるようにポジティヴなことですから、語ってしまったことのリスクはどうしても背負わなければならないわけです。それで、ポジティヴになれる場所というのを必死になって探した。とにかく捨てることができるものは、最後の最後まで捨てていって、もうこれ以外に肯定する場所はないといったところが自分の言葉の場所ではないかと思いましたね。

橋爪●大澤さんは、言葉を非常に個人的なもののように言われたけれども、もちろんそういう部分もあります。でも、そういう部分は半分ないしは三分の一ぐらいで、あとは相手の中に入ってから後のことです。つまり、とりあえず送り出すときは責任をもつけれども、いったん話されてしまえばそれはもうすでに当人のものとは言えない。ですから私は、なるべく相手の中に入りやすいようにしてやるのがいいと思っているわけです。

――言葉のことで言えば消費社会はコピーライターという人種を生み出しましたが、わずか一行か二行のコピーが時代を表現する言葉となって、ものすごい勢いで流通したという事実はどう受けとめておられますか。

橋爪●以前、糸井重里さんと対談をした時に彼が言っていたことは、自分は全共闘世代で言葉にだまされたと。だから言葉の本性、メカニズムをつかんでそれをわがものとしてやりたいんだと。

堤●男にだまされた女性が娼婦になったというような話ですね(笑)。

橋爪●似たようなことは学問の世界でもあると思う。

あまり商売のネタを話したくないのですが、私は自ら「水中花の戦略」と呼んでいる方法があります。水中花というのは、乾いている時は細い紐状になっていますが、水に入れるとパッと花を咲かせる。要するにそれと同じで、相手の中に入りやすいようにできるだけスリムな言葉にしておいて、スルッと入るとあとは、相手の中でしだいに花を咲かすように膨らんでいくような思想。バイブルなんかもそうですが、実にすんなり身体に入ってくる。しかしいったん入るとその意味がどういうものか気になりだして、だんだん自分の中でそれが大きくなっていく。最初から満開になった花というの

は、見た目はすごいかもしれないけれど、インパクトとしては案外弱いように思う。

大澤●橋爪さんはその戦略では一貫してますね。コピーライターということについて言いますと、確かに広告のコピーというのは八〇年代的な言説であったことは明白だろうと思います。思想でさえもコピーライトになってしまったわけですから。

コピーライトあるいは広告の言説というのは、これまでの議論の続きで言えばまさになにも積極的なことを語らないことによって商品を奨励してしまうという意味での、逆説的なポジティヴィティをもったものです。その場合の言説は、極端に言えば理解されなくてもいいわけで、要は享受されればそれで済んでしまうものなのです。こういう言説のあり方というのが一気に蔓延してそれこそ思想の分野にまで広がっていったのが八〇年代だったわけです。ドゥルーズやガタリが哲学の仕事はコンセプトをつくることだと言ったわけですが、彼らも指摘するように現在ではそれは主に広告代理店の仕事を表す言葉になってしまった。もちろん、彼らは、哲学の使命としてのコンセプトの創造ということは、広告代理店でいうところのコンセプトづくりということとは全然違うのだと、警告しているわけですが。

堤●またアイロニカルな言い方になってしまいますが、私は消費社会が終わったことは、ある意味で広告代理店の時代も終わったんだと思っています。演出すべき社会が終わったわけですから、演出家である広告代理店が消滅するのは普通のことだと思います。

大澤●確かに八〇年代は商品をつくるよりも、それを演出する広告の仕事のほうがカッコいいという時代でした。モノの実質よりもそれがもつシニフィアンのほうと関わりたいという雰囲気で、いかにも消費社会的です。しかし、そうした雰囲気もさめてそれがそのまま広告代理店の退却を示しているというのはその通りかもしれませんが、それはもしかすると広告代理店の潜在的な勝利でもあるのかもしれません。ディズニーランドと死の関係のように、すでに我々の内部にそれは拡散し浸透しているがゆえに、かえって見えなくなってしまったと言えなくもない。

産業社会の無意識

大澤●死が消費社会の文脈に乗りにくいといいましたが、環境問題やAIDSも消費社会的な言説とはフィットしないものです。というのも、環境問題というのは、すべての差異にとって前提になるような――したがって完全には相対化できない――最終的な差異、つまり人間(の社会)と自然という差異にかかわっているからです。消費社会というのは、どんな差異も与えられる度に相対化していくという運動だったわけですが、この差異だけは、相対化しつくすことはできない。私の考えでは、「環境問題」ということを問題化し、対応しようとすること自身が、少なくとも今のところ、この根本的な差異に対するきわめて巧妙な隠蔽になっている。巧妙な隠蔽というのは、環境保護というのが、この差異そのものを移動させようとする運動にたずさわっているかのような幻想を与えるということです。今述べたような根本的な差異を動揺させているのだとすれば、環境問題というのは解消不能な不安を与えるはずなのに、まさに環境保護のためにいろいろと強迫的なまでに活動しているということが、人を安心化する作用をもっているわけです。環境問題というのは、現在誰でも知っていながら、誰も本当のところは信じていない問題でもある。

堤●今、盛んに言われている環境を守れという掛け声はまだ消費社会的ではありますね。また悪口で申し訳ないが、広告代理店の単なる商材として使われている面がかなりあります。しかし、消費社会のパラダイムがほころびはじめて、今までのようになんでも商材になった時代ではなくなっていますし、本当の環境問題を商材として取り扱いきれるかどうかということで

はかなり怪しいと思っています。持続可能な成長というようなごまかしではない、新しい経済学のパラダイムが出てこなければ扱えないようなものだと思うのですが。その意味では環境問題が一つのきっかけとなって経済学の再構築が起こればいいと思います。

大澤●環境問題は産業社会のいわば無意識の部分から構成されているという感じがするんです。それゆえにその無意識を意識化するという運動の中にはじめから一種の転倒、言い換えれば困難というものがはらまれていると思うのです。環境問題に対する脅迫観念とそれの防衛処置が実は環境問題の本質を結果的に隠蔽することになる。そういう構造だと思うのですが。

橋爪●まあわかるような気はしますが、私はもっと単純化して、環境問題とは一種の危機管理だと思います。

危機管理というのは、簡単に言えば、問題を不在にすることによる解決方法です。たとえば火事を例にすれば、大火事が起こらないように緻密な予防措置をとることによって、実際に大火事が起こらなかったとします。危機管理が成功したわけです。ところが危機管理が成功すると、危機の存在は曖昧になる。その結果、ほんとうに危機があったのかといった疑念がわいてくる。誰にも答えられない。危機管理というのは、常にそうした決定不能な部分をはらんでいるわけで、決断とコストのバランスが問題になるのです。

環境問題も現前しない危機です。その意味では、危機管理一般の構造と本質的に同じで、なにも環境問題だけに特徴的なことではないのです。そうであれば、そんなにアイロニカルなことと受け取らずとも、ごく健全な危機管理の一つとして環境問題をとらえればいいのではないでしょうか。

大澤●私はもう少し原理的に考えていて、環境問題ということは近代システムにとっては根本的な困難をはらんでいると思っているのです。近代社会のシステムというように今は限定しましたが、およそシステムというものはこの問題について決定的な解答をもつことができないのです。環境問題というのは、システムが無意識のうちにとどめているまさにその限りで、システムの行動の一般に一貫性を与えることができるような、そういう問題だと思うわけです。システムが無意識の部分というのは、もちろん、たくさんあって、たとえば、通常の資本制社会ならば、生産や分配に関する大部分が、システムの盲目の――つまり無意識の――活動にまかされているけれども、社会主義というのは、そのところを意識化しようとした、そして大きな代償をはらわされたわけです。環境運動というのは、原理的に言えば、社会主義なんかよりももっと深く潜行しているシステムの無意識部分を、意識化しようとすることを意味する。そのことの逆説性に、私たちはもっと敏感であるべきだと思います。

橋爪●産業社会の成立条件を満たしながら環境を維持できるか、ということが問題だと思うのですが、大澤さんは、産業社会というシステムそのものが環境に負荷をかけ続けるものだということをおっしゃっていると思います。確かに産業社会は、単純化すれば「資源の投入→製品の産出」につきるわけで、資源自体は環境に負荷をかけないかたちで存在するかもしれないにせよ、それを取り出す段階で環境条件を変化させてしまう仕組みになっています。また製品は、人間にとって有用でなければ単なるゴミとして扱われます。ですから、産業が動けば動くほど環境への負荷が大きくなるという根本的な構造をもっています。

ではなぜ産業社会がそうやって加速してしまうのかというと、大量の資源を使って短期間に速い速度で産業システムの中を通過させることで、より多く付加価値＝利潤が得られるからです。であれば、この計算方法を変えるしかないわけです。もしも付加価値を測る測定法を変えることができれば、それで解決することなのです。単純に資源に負荷を与えるものが大きければ、それにみあったかたちでコストをかけるとか、いろいろな方法がとりあえず考えられると思います。もちろんそのためには技術的な問題をかた

づけなければならないとは思います。私はそうした技術的な条件を、ハード・パスと呼んでいるわけですが、こうしたハード・パスを突破する方向で、いまや人類は全力をあげてこの問題に立ち向かわなければならない時代にさしかかっていると思うのです。

――なにか具体的な解決策をおもちですか。

橋爪●地球へのエネルギーの投入とその放散のバランスがとれていればとりあえずは熱平衡が保たれるわけで、生態系を維持することができます。この制約条件内で産業社会を高度化していくことがどこまで可能かということになりますが、いくつか方法があると思います。さしあたって可能な方法は、単純に頭数を減らすことです。一人当たりの資源使用量が年ごとに上昇しているわけですから、人口を削減するのが手っ取り早い方法です。もう一つは、技術のミクロ化を進めて、同じ資源量で付加価値の高い製品を生産する方法を徹底的に追求することです。この両者を組み合わせて当面を乗り切れば、またその後は、核融合や宇宙ファクトリーなどの技術開発によって、さらに解決を図ると思います。

大澤●環境問題はとりあえず人口問題です。その意味で橋爪さんのアイディアは面白いのですが、人口を減少させるという選択は実は大変難しい。先進諸国では事実人口は減少しているわけで自然減ということはあるかもしれない。しかし強力な政治権力によって人口をコントロールするということは、中国などの例があるように、さまざまな弊害を生むうえに、成果も部分的なものにとどまります。しかし、そもそも人口に対して恣意的な選択が可能ならば、環境問題など問題にならないはずなのです。環境問題は、より深刻な問題、つまり人口問題を棚上げにする口実なのだ、という人すらいるくらいです。人口というのは究極の所与です。先ほどから言っていることは、つまりそうした所与について合理的な選択ができないということが根本的な困難を導き出しているということなのです。

堤●ただどうでしょうか、これまで確かに人間は己の欲望を拡大する方向ばかりを見ていました。しかし、それが今行き詰まってきている。人間の欲望を刺激させ続けるということが成り立たなくなってきたわけです。消費社会がここにきて急速に終息しつつある今、人間の欲望も変化しているとも考えられるのではないでしょうか。もちろんそれはすぐに大きな変化になるとは思えません。中世が消滅して近代が生まれるまでにそれこそ四、五百年かかっているわけですから、百年、二百年はかかるかもしれません。その間にもばかげたことをずいぶんやるでしょう。しかし、人間は決して愚かではないので、そういう中から産業社会ではない社会がきっと生まれてくると思います。

大澤●私はどうしてもペシミスティックに考えてしまうのです。というのも明らかに合理的だと思われる選択が結果的に選択されないということは経済学やゲームの理論の初歩的なシチュエーションです。これは人間の知恵の問題というよりも、むしろシステムの構造的な問題だろうと思うのです。このパラドックスを解決することはきわめて難しい。

橋爪●それはよくわかりますが。

新しい経済学の必要性

――消費社会が終息しているという実感は確実に感じますが、はたしてその後にはどのような社会が出現するのでしょうか。最後に皆さんにお聞きしたいのですが……。

橋爪●人口の削減ということを言ったのは、なにも権力などで強引にコントロールしろとか、自然に減っていくというような楽観論で言ったのでは

ありません。人間類型が変わっていくということなんです。最初に言いましたように、生産／消費でいえば、消費の部分を刺激し続けるというのが産業社会、とりわけ消費社会というものでした。そこへ、いろいろな理由で限界が出てきた。それは、産業社会というパラダイムそのものの限界でもあったわけです。

そこで思うのですが、技術的な効率条件によって分離されてきた産業構造、また生産／消費の関係が、また技術的な条件が整うことによって接近するということは十分考えられることだと思うのです。産業社会がさらに進展して進んでいくことによって、たとえば生産でも消費でもない活動領域が拡大してくる。あまりモノをつくらないで、またあまりモノを買わない領域とも言えるのですが、それに社会的な承認が与えられるということは考えられることです。それは逆に言えば、モノを生み出すことと、享受することがはっきり分離されない領域でもある。そういう領域、いわば表現の領域が社会化すると、それにともなって道徳や人間観も変化してくるはずです。人間というのはそれほどばかだとは思いませんから、かならずそういうかたちで新たな思想体系、人間類型が生まれてくると私は思っています。

これまでは子供を産むことに価値を置いた人間観が支配的でした。子供を産むことが社会にとってだけではなく、個人にとって重要な問題であるような、そういう人間観によって支配されていたわけです。だから産むなといえば、それは権力的なコントロールになってしまいます。しかし、そうした人間観そのものが変化するということがありえるのです。たとえば子供の生産は試験管ベビーに頼って、当然結婚というかたちも家族という形もとらない社会が出てこないとはかぎらない。

大澤●家族形態がなくなるというのは面白いことです。ただ、最近の猿学などの研究で、猿は相当に高度な知的段階に達していることがわかってきていますが、人間と最終的に分かれるところはまさに家族があるかないかです。その意味では果たしてそれを完全に捨てるような人間観が将来コンセンサスをとることができるでしょうか、わたしにはわかりません。

死や誕生ということは、長いあいだ、人類にとって、選択不能な所与でした。しかし、このことは、実は、気がつかないうちに、われわれにとって正の機能を果たしてもいたわけです。たとえば、私たちの社会を基礎づけている基本的なアイディアに「権利」ということがある。権利をもつということは、何らかの意味での選択性、選択可能性というものを、その者に対して社会的に承認するということです。しかし、何らかの選択可能性の領域を設定するということは、逆に、選択不能性ということが前提になっているからこそ、可能なのです。選択ということは、選択前提が与えられており、選択されていないからこそ、可能なのです。そして、その選択不能性の究極の線が、死とか誕生とかいうものによって区切られていた。ところが、たとえば安楽死の問題などが出てきて、死すらも選択の対象となる。この問題などは、死に関して、技術的手段によって選択可能性が拡大してきた結果、かえって、どこで死すべきかという選択に関する決定不能性が露呈してしまった例だと思うんです。生についても同様で、産まない選択の自由ということがまずあり、さらには、これはアメリカで出されたある判例に見られるのですが、そもそも自分自身が生まれない選択の自由、生まれない権利ということすら認定されるようになった。こういう形で選択にとっての所与が選択の対象となっていくことは、細かい推論は省きますが、気がつかないうちに権利のような基本的な概念の基礎をおびやかす。しかも、権利ということの過剰な拡張によってです。権利のような基本的な概念の危機は、新しい人間観の登場というよりは、およそ可能な人間的条件の破綻ということだと思うわけです。こういうときに、コンセンサスをとれるような、いやそもそも論議の対象となるような、積極的な思想を創出することは、著しく困難なことでしょう。

堤●自分を根拠づけるものがなにもなくなるという社会は、私にはちょっと考えにくいところですが、確かに大澤さんのいう意味もよくわかります。ただ、たとえばセックスというものを商品化したことによってセックスの快楽が逆に拡散したということはあるわけです。そして現実に人口の盲目的増殖を抑制する方向に働いた。そういうかたちで意識化されるということは私はありうると思うのです。産業化社会が行き着くところまで進んで環境を破壊しつくす。しかし、その段階でそれが意識化されることによってそれを回避しようという働きも当然起こってくるわけです。ですから私は、もう少しポジティヴに考えたい。消費社会をできるだけうまく、しかも早く通過することによってそうした新しい社会へテイク・オフしたい。そのためには、そうした新しいパラダイムに対応するような経済学や思想がどうしても生まれる必要があります。その意味でもポスト消費社会、あるいは消費社会に代わるパラダイムというものが待望されるのです。

――新しいパラダイムというのは、結局後になってみてあの時から変わってきたんだなとか、新しくなったんだなとわかるような性格のものですから、その渦中では自覚できないことかもしれません。しかし今日のお話の中で、とにかく消費社会というものが確実に別の社会に変わりつつあるということはよくわかりました。おそらくこの終焉を冷静な視点で見つくすことをしない限り次のパラダイムも予測できないのでしょう。

今日は長い時間ありがとうございました。

［1992・06・26］